

(大正8年8月)

陸軍中將 佐藤 鋼次郎

編集委員長…過去の偕行記事の中から興味深いものを紹介したい。

大正期の佐藤中將の『隨感隨錄』である。大隈侯が題材になつてゐるが、偉くなると勉強しなくなるといふ人間の甘さへの警鐘である。自衛隊でも部下の書いたものをそのまま棒読みする將官がいたし、部下の書いた書類を上司に全部説明させていた課長もいたような気がする。

なお、現代用語に編集させて頂いた。

## ●大隈侯の言

私は、現役にあつた時は、新聞上の大隈侯しか知らなかつた。それ故、有り体に言へば、「大隈侯とは、他人の入れ知恵で大言壮語する人なり」と解釈してゐたのである。

閑散の身となつてからは、縷々侯と接触する機会を得て、実際に侯の博学多識なことを知つて、ある日、私が侯を誤解してゐたことをありのままに侯に告白した。

すると侯は、「馬鹿を言つちやいけない。法螺など吹くものか。頭脳も身体と同じで、使えば使うほど健全にな

るものだ。多くの人は身体を健全にすることに注意をするが、身体ばかりが健全でも頭が惚けてしまつては、長生きしても意味がないではないか。俺は毎晩7時から10時まで読書をする。それで頭が健全で、新しい時代にも遅れないのである」と、誇らしげな顔で、頭を叩きながら破顔一笑された。

実際、我々が講評する時でも、補助官が所見として提出する入れ知恵は、自分にそれに見合う知識がない場合は、詳しく説明を聞かなければ容易には受け入れられるものではない。

しかし、自分にそれ相應の知識がある事柄については、覚え紙に書いたほんの1行であつても、その入れ知恵を咀嚼モルジュ玩味ガンミして、それを敷衍フイエンして長々と弁舌をふるうことができる。

大隈侯も同様で、もし入れ知恵があるととしても、頭脳に相當の知識が宿つていて、よくその入れ知恵を吸収することが出来なければ、受け売りであつても容易なことではないのである。

頭脳を健全にして知識の吸収力を強化するに、名案はない。常に頭脳を適度に使つて、頭が惚けないようにするほかない。

大隈侯が惚けないのは、あたかも身体を鍛えると同様に常に頭脳を鍛えておられることが、明らかに証明されてゐるのである。